

パプリカの早熟栽培におけるオープンハウスの利用効果					
[要約] <u>パプリカの早熟栽培</u> では、 <u>オープンハウスの利用</u> により夏季のハウス内の <u>最高気温</u> が5～8 低下するため、 <u>種子数</u> や <u>着果数</u> が増加し、 <u>果実品質</u> が向上するとともに <u>商品果収量</u> も2割程度増加する。					
担当部署	野菜栽培部・野菜栽培チーム			連絡先	092-922-4364
対象作目	野菜	専門項目	栽培	成果分類	技術改良

[背景・ねらい]

パプリカは健康機能性が高く、彩りの良い新規野菜として近年、国内での需要が伸びているが、国内では土耕における栽培技術の確立が遅れている。低コストな作型であるパプリカの早熟栽培では、夏季の高温によると思われる収量や品質の低下が問題となっているので、屋根開放型のビニルハウス（オープンハウス）の利用効果を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1．早熟栽培のパプリカにおいて、オープンハウスは、慣行ハウスに比べ、株当たりの着果数が多く、商品果収量は2割程増加する（表1）。
- 2．9月以降の収穫果実の種子数はオープンハウスが3～4倍程度多いため変形果の発生が少なくなりA品率、商品果率が向上し、9月以降の商品果収量はオープンハウスが慣行ハウスより3倍程度多くなる（表1、図1、図2）。
- 3．初夏および盛夏季の日最高気温はオープンハウス内が慣行ハウス内より5～8 程度低く、35 以上になることはない。また、日平均気温も5月中旬から9月上旬までオープンハウスが1～2.5 低く30 を超える日はない（図3）。
- 4．オープンハウスでは盛夏季の気温が慣行ハウスより低く経過するため、この時期の花粉の形成や発芽等が正常に行われ、種子が多く形成されることにより着果率が高まるとともに開花後50日～60日で収穫する9月～10月の果実の品質が向上し収量も増加する。

[成果の活用面・留意点]

- 1．梅雨明けから10月上旬の晴天日は、日中の高温時にクールホワイト(遮光率45%)等で遮光(可動式)を行うとともに、かん水管理に気をつける。
- 2．タバコガ、ヨトウムシ、カメムシ等の防除のため2～4mm目合いの防虫ネットでハウス全体を覆う。
- 3．オープンハウスでは天井ビニルを開放すると急激に湿度が低下し、品種によってはひび果の発生が増えるので、乾燥時は畝間かん水で湿度を保つ。

[具体的データ]

表 1 早熟栽培における施設の違いと収量および品質

施設の 種類	商品		A 商品				障害果発生割合		
	果収量 kg/a	総収量 kg/a	着果数 個/株	品率 %	果率 %	1果重 g	変形果 %	ひび果 %	裂果 %
オープンハウス	1355	1479	28	72	91	129	14	10	2
慣行ハウス	1123	1269	25	64	88	128	26	4	1

- 注)
 1. 品種：フィエスタ
 2. 定植：3月26日
 栽植密度：417株/a
 主枝2本仕立
 3. 間口6m、長さ15m、軒高150cmのハウスで、5月中旬～7月中旬および9月上旬は30以上で屋根を最上位まで開放、7月下旬と8月は降雨時以外開放
 4. クールホワイト（遮光率45%）で7月～10月上旬の晴天日に遮光
 5. 防虫ネット（4mm）で覆う

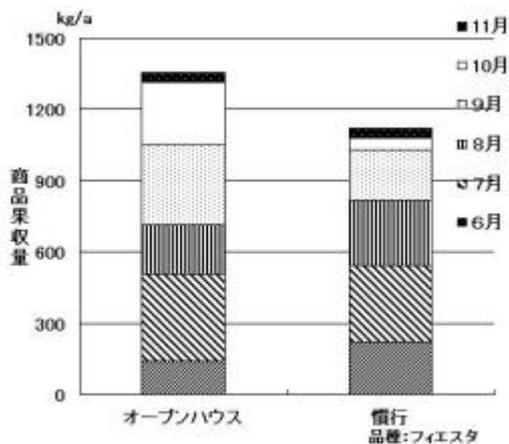


図1 施設の違いと月別商品果収量

(平成14年)

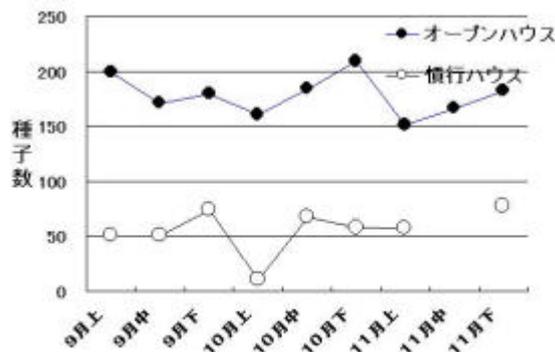
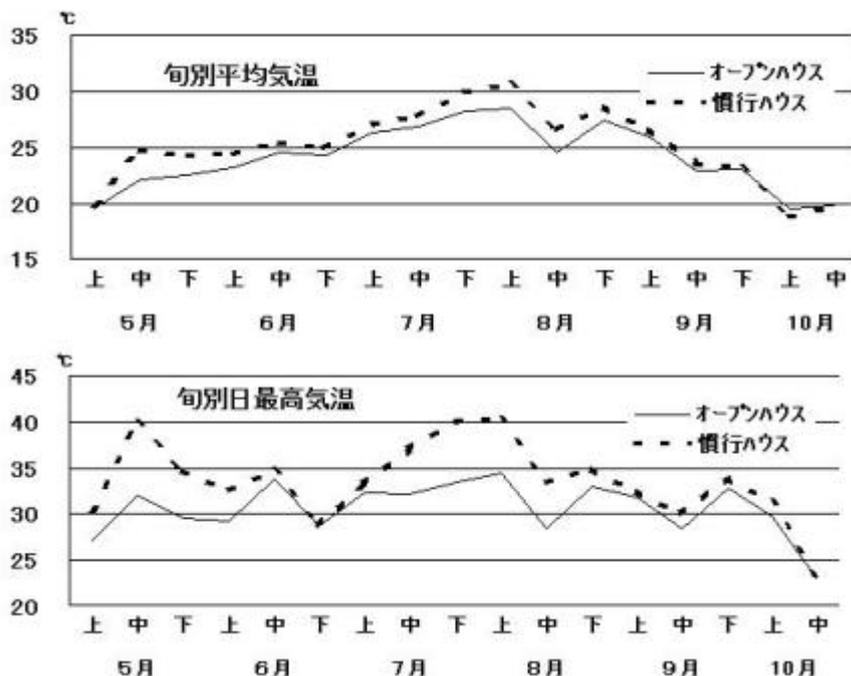


図2 施設の違いと時期別果実の種子数

(平成14年)



注) 測定位置はハウス中央部、高さ120cm

図3 施設内の旬別気温

(平成14年)

[その他]

研究課題名：早熟栽培におけるパプリカの高品質安定生産技術の確立：
 予算区分：国庫助成（新技術）
 研究期間：平成14年度（平成13～14年）
 研究担当者：井上恵、古賀武子、林田達也

